



## 連載第3回

Between Cinema   
 & Geology

by ロッキー鈴木

子供に子供の演技はできないのだという話

「ハリー・ポッター」の1作目で魔法学校の校長を演じている味のあるジイさんは誰だ?とエンドロールを見ると、リチャード・ハリスとわかり、びっくり。ハリスは70年代の大スターで、ハンサムではなくどちらかといえば異形の人なのに、次々と大作の主演を務めた。

評価のほどはよくわからない娯楽大作—「カサンドラ・クロス」など—が多かったけれど、やっぱりイギリス人は顔だけで選んだりしない民族なんだなあ、と変に感心していた。そのハリスが11月、他界してしまった。青春時代の名残を娘と観た映画に見つけた気がしてただけに、とても寂しく思った。

さて、ハリー・ポッターことダニエル・ラドクリフが来日、ファンの大歓声を浴びた。「シックス・センス」のハーレイ＝ジョエル・オスメントの時もだったけれど、インタビューでの彼らのしっかりした受け答えは、私たちの国の10代のアイドルと比較するまでもなく、実に堂々として聴きごたえがある。ユーモアをまじえつつ、しっかりとした意見を述べ、さりとして年齢相応のフレッシュさも漂わせ、同じ年の娘を持つ親として考えさせられるが、思うに、本当のプロフェッショナルなんだろう。

もともとハリウッドでは、「子役として売れると大人になってから大成しな

い」ジンクスが囁かれる。特に男の子の場合、「ホーム・アローン」のマコーレー・カルキンなど、成長とともに曲がってってしまう人が多い。金にまつわる、取り巻きにまつわる、ありがちなゴシップがよく流される（日本の場合、「ケンちゃん」の落魄ぶりと「大五郎」の転落ぶりがこれにあたる）。

もちろん実際にはそんな悪い例ばかりではなく、特に女性の場合、リズ・テラーをはじめ子役で「オズの魔法使い」、長じて「スタア誕生」という2大傑作を残した、偉大なるジュディ・ガーランドのような人も過去にいたし、12歳の時、「タクシードライバー」でのキワどい汚れ役からキャリアを起こし、現在もなおトップ女優に君臨するジョディ・フォスターもいる。まだまだ若いけれど「レオン」から「スターウォーズ」のナタリー・ポートマン、そうそうアンナ・パキンもいる。

そういえば、かつてのダイアン・レイン（「小さな恋のメロディ」）、ドリュー・バリモア（「E・T」）、アリッサ・ミラノ（「コマンドー」）など、日本の熱狂的（ロリコン?）ファンの衰えない声援の中、大人になって突然カムバックを果たす女優も沢山いる。日本人のアイドル指向も相変わらずですね。「ハリー・ポッター」のハーマイオニー役のエマ・ワトソンも超カワイイので、日本のファンの

熱い声援を受けているであろう（うん）。

なんだか例のジックス、日本の方がもっとあてはまる気がするけど、それはそうと日本の場合、たとえば「おしん」など、いかにも「子どもが頑張っている」風なのは どうしてだろう。その子役たちがインタビューになると、突然「地」

（最近では「素」）と称される、そのまんまの姿を曝け出すのはなぜだろう。

かの有名な「純と蛍（吉岡秀隆と中嶋朋子）」の場合でも、演技は本当に上手だが、いかに「地」を活かすか、という演出上のつくりになっているのは、先日の

吉岡君と内田有紀との披露宴を見ても明らかだ。イメージにあう配役、自然な演技、という訳だ。

ハリウッドの彼らの滲み出る人間性は、だから彼らの高度な演技力のなせる業ともいえるのではないか。つまりは彼我の実力の差、と。で、その差は何が作るか。教育なんでしょうね、当然。Mr.

ラドクリフの今後の活躍を祈ります。

女優について、日本勢のイチ押しは、小学生にして「ヒマラヤ杉に降る雪」でハリウッドに進出、「リターナー」で成長期の女性らしいカッコ良さを見せた鈴木杏で、TVでも大活躍だが、何よりもうちの娘と同姓同名である！最初は迷惑

そうだった我が家の鈴木杏も、最近ではちょっと得意気なくらいだ。

子供らしい子供としての演技は、子供の演技、子供っぽい演技、稚拙な演技とは全然違う。いかに子供らしさを表現するか、という計算された高度な演技で、それをまだ若い俳優が演じなければなら

ないのが、「子役」という職業の難しさなのだ。

（※前回、「いつも心に太陽を」と「チップス先生さようなら」をカン違いしてしまいました。アムソーリー、Mr.ポワチエ。）

（イラストレーション：古川幸恵）

